

薬剤師の心構え

薬学部 薬学科 6年

060973255

武藤 瑛里子

この研修を通して一番感じたことは、薬剤師という仕事の重みと可能性だ。アメリカではテクニシヤンの存在により調剤その他多くの業務が省かれ、より治療に専念できる環境が整っていた。チームの一員として共に病棟をラウンドし、医師と共に治療について話し合ったり患者さんの診察を行ったり、看護師の相談を受けたりしていた。

現地では、午前はグループに分かれて各訪問先を訪ねて学び、午後は講義を受けたのち、皆でその日学んだことのフィードバックを行うことで理解を深め、疑問点は次のグループの課題として挙げ、情報を皆で共有していくことを繰り返しながら研修を進めていった。個人的な課題として、どの訪問先でもなるべく多くのことを学べるよう、質問を作ることを常に念頭に置きながら取り組むことで、教授やスタッフ方の話をより注意して聞くことができたと思う。また、自分の英語力の未熟さから理解出来ない内容については、なるべく確認の質問を返すことで、より正しい知識を残せるよう意識しながら取り組めたと思う。

研修中特に驚いたのは、ワーファリン外来と糖尿病外来の存在である。どちらも、ある程度症状の安定してきた患者さんを対象に行われているもので、医師の診察を介さずその間を埋める形で、薬剤師が直接患者さんの経過に関していく体制が組まれている。責任は重いが、それだけ薬剤師が社会から信頼されているのだと感じた。ワーファリン外来では、INR 値の測定を行い、ガイドラインやその他インタビューを用いて薬剤師が単独で用量変更を行うことが出来る。この背景には、確立したガイドラインの存在がある。この外来のおかげで医師の診察時間が短縮し負担が軽減されることで、他の患者に対して割くことのできる時間が増え、医療の質の向上にもつながるのではないかと思う。患者もより丁寧に医療従事者と接触することができる。ここまで確立した外来は難しいかもしれないが、ぜひ日本でも始められたらと思う。糖尿病外来では、患者の生活習慣について細かく指導していた。どちらも時間をじっくりかけ患者さんの話を聞き、またインタビューも丁寧だった。患者さんと接する薬剤師の姿に共通して感じたことは、患者さんの生活を否定しないことである。患者が不安を感じていたら、たとえ測定値が悪くとも良い部分を褒めたうえで、どう改善したらよいか、相手に合わせて丁寧に説明していた。特に食事については、禁止するのではなくどう食べたら良いかを説明し、個々の患者の食生活を考慮したうえでそれにあつた用量調節や生活指導をするようにしている点に驚いた。その方が QOL の向上にも繋がり、特に長期間服用を続ける薬を用いる際に、大変良い考え方だと感じた。しかし、日本の方が患者さんに対する情報提供書の作成はより丁寧だと感じた。お薬手帳の存在や、読みやすい薬情の作成などに関して、より発展させていけたらと思う。

非常に興味深かったのは、Children's hospital という小児科専門病棟での出来事である。ここには simulation center といって、チームを組んでダミーを相手に緊急救命の訓練を行っているところがある。このチーム内に薬剤師も含まれていたのだ。「薬剤師は薬剤部にいるだけでなくチームの一員だから、一緒に訓練するのよ」という、看護師の言葉をととても嬉しく感じたのを覚えている。また、研修中は実務実習中の薬学生とも接する機会があった。彼らは早朝から電子カルテを確認し、医師も含めたチームと共に実際のラウンドに参加したのち、担当教員とその内容について細かくフィードバックを含めたディスカッションを行っていた。様々な患者さんと接する機会があるため、薬のことはもちろん病気のことに関しても詳しく学習しており、臨床を強く意識した研修であると感じた。また、他のクリニックにおいても、薬学生は実践の場で学ぶという印象を受けた。もちろん事前の準備は行うが、実際により多くの患者さんと接し様々な病状に触れ、個々の患者さんの病態の把握からゴールの設立、それに対する適切な薬物治療の考案を繰り返していくことで、薬の特徴やその使い方を学んでいくのだと感じた。これらを繰り返していく中で、患者さんとの接し方や根拠ある情報の集め方なども学んでいく。

また、緊急時の対応に関しては流れが事細かにマニュアル化され、より迅速に対応できるようになっていた。重症度別に患者を誘導する体制、抗菌薬の使用法、薬剤師ボランティアの募集、処方せんの発行方法など。日本の方が自然災害も人災も少ないが、対応体制に関しては学ぶものがあったと思う。

これらの研修を通して一番学んだことは、薬剤師の心構えや治療に対する姿勢についてだ。臨床の現場では常に選択がせまられる。個人差のある個々の患者さんにあったベストな治療を選択しなくてはならない。5つ良いと思われる治療法があったとき、その中からベストな治療法を選択しなくてはいけないのだ。その際、良いと「思う」ではなく、薬物治療に携わるプロとして責任を持ち、根拠ある選択ができなくてはいけないということに改めて気付かされた。そのために、生涯研鑽の精神で自分を磨き続けなくてはいけない。サンフォード大学では、このようなマインドを「Developing Critical Thinking Skills and the Confidence Necessary for Patient Care」として生徒へ伝えている。また実務実習指導教員の Dr は、自分達は生徒に対して答えを教えるのではなく、「いかに薬剤師らしく考えられるか」を指導しているとお話しされていた。

今回の研修を通して感じたのは、当たり前なことだが、日本もアメリカも、患者さんのために最適な治療を提供しようとする姿勢は同じだということだ。業務内容の幅に違いはあるが、学ぶことを学び、病態を把握し、最適な治療を提供する。薬学生の実務実習に関しても、自分がもっと能動的に深く関わろうとすれば、さらに多くのことを学べたはずだと気付いた。したがって、結局は

自分がどう取り組むかが一番重要なことだと感じた。学ぼうと思えばいくらでも機会はある成長できる。

これからは、勉強するのは将来薬剤師として患者さんに関わる者としてその際必要となる知識を得るためだということを常に意識し勉学に励みたいと思う。